

# 経済・金融 フラッシュ

## 1月マネー統計 ～銀行の“運用難”の色彩が弱まる

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

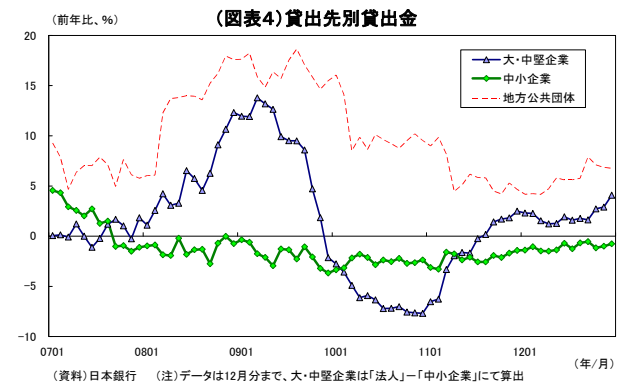
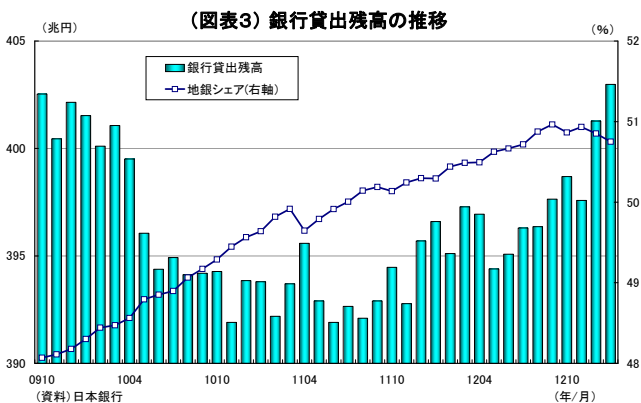
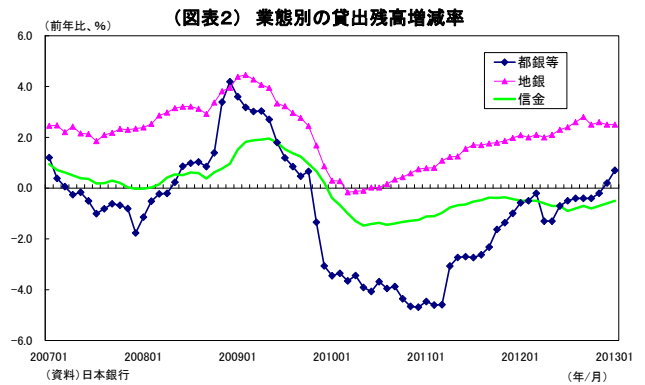
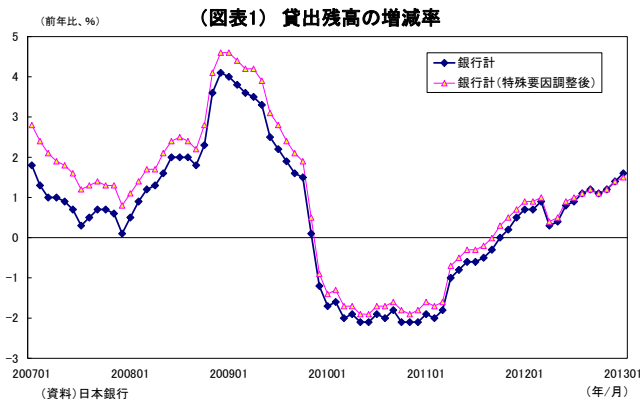
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

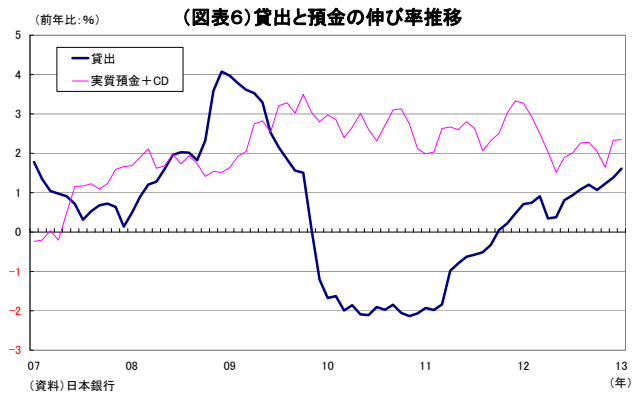
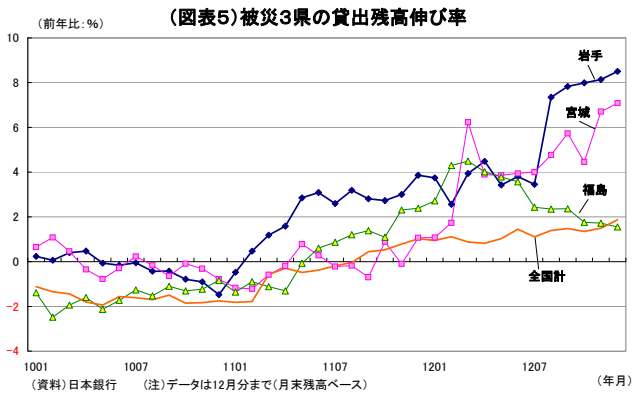
### 1. 貸出動向：都銀の伸び率が拡大

日銀が2月8日に発表した1月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行貸出(平残)の伸び率は前年比1.6%(前月は同1.4%)となった。伸び率の拡大は3ヵ月連続で、水準は09年8月以来の高水準となる。銀行貸出の増勢は徐々に明確化してきている。

業態別の内訳では、地銀(第2地銀を含む)が前年比2.5%(前月も同じ)、都銀等が同0.7%(前月改定値は0.2%)と引き続き地銀が優勢だが、都銀のキャッチアップも進んできている。貸出先別でみると、依然として中小企業向けはマイナス圏が続くが、大・中堅企業向けが好調さを増している

なお、貸出と預金との関係を見てみると(図表6)、依然として預金(実質預金+CD)の伸び率が貸出を上





回っており、預金流入超過の状態が続いているが<sup>1</sup>、貸出の増勢が強まってきたことで両者の差はかなり縮小している。預金流入超過に伴う“運用難”への対応として、これまで銀行は国債を積極的に買い入れ、国債需要を強力に支える一つの要素となってきただけに、今後の動向と影響が注目される。

## 2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：企業の資金需要増はずかに鈍化

1月23日公表の主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2012年10-12月期の銀行から見た企業の資金需要増減を示す企業向け資金需要判断D.I.は4と2四半期連続のプラス(“増加”とする回答が優勢)となったが、前回(7-9月期)の5からは1ポイント低下した。増加の要因としては前回同様、「貸出金利の低下」が企業規模を問わず最多となっており、金融緩和の効果も資金需要に一定程度効いている模様。

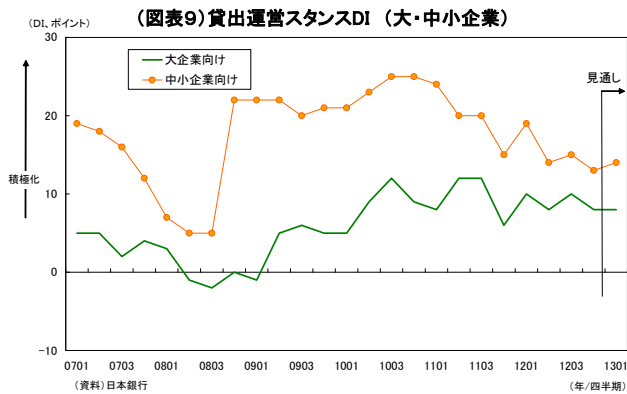
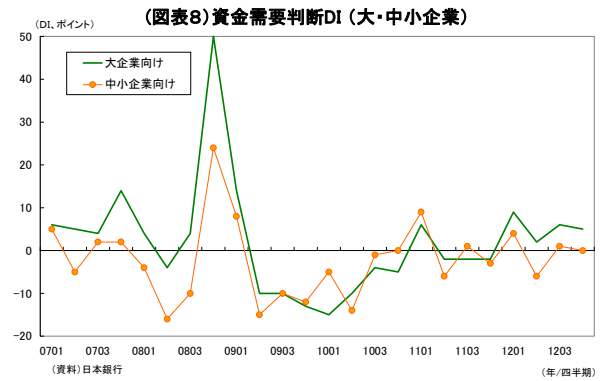
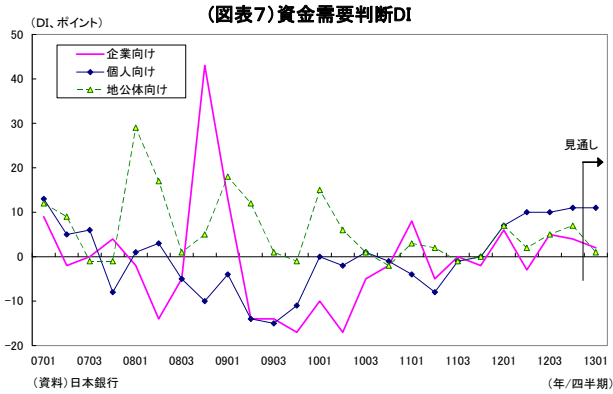
企業規模別では、大企業が5、中小企業が0と、ともに前回比で1ポイント低下し、中小企業では増加と減少が拮抗する結果に。業種別では前回の牽引役であった建設・不動産の低下が顕著になっている(大企業5→1、中小企業3→▲2)。

一方、個人向け資金需要判断D.I.は11と前回から1ポイント上昇しており、D.I.の水準も企業向けをかなり上回っている。牽引役の住宅ローンの増加理由では、今回、「住宅投資の拡大」が「貸出金利の低下」を上回る形で最多となっており、消費税率引き上げ前の駆け込み需要が一部発生した可能性がある。

今後3ヵ月の資金需要見通しは、企業向けが2(前回比2ポイント上昇)、個人向けが11(同4ポイント上昇)と引き続き個人向けの堅調を見込む向きが多い一方、企業向けについては未だ慎重な見方が根強い(図表7,8)。

また、10-12月期の銀行の貸出運営スタンス変化を示す貸出運営スタンスD.I.は、大企業向けが8、中小企業向けが13とそれぞれ前回比で2ポイント低下。依然、積極化したとする回答が優勢だが、勢いとしては鈍化している(図表9)。

<sup>1</sup> さらに、伸び率の分母である残高では、預金が貸出を170兆円程度上回るため、仮に両者の伸び率が同じでも、預金増加額が貸出増加額を上回ることになる。

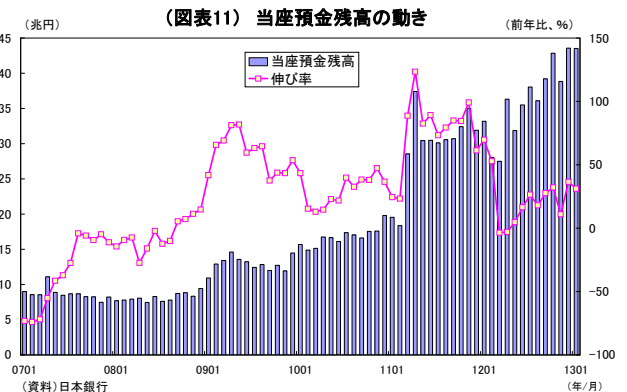
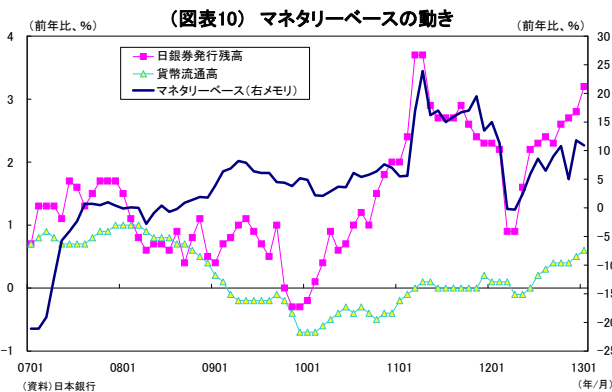


### 3. マネタリーベース： 実質的に過去最高を更新

2月4日に発表された1月のマネタリーベースによると、日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示すマネタリーベース(平残)の伸び率は前年比 10.9%と、前月の同 11.8%に続いて2桁の高い伸びを記録した。日銀当座預金の伸び率が前年比 31.2%(前月は同 36.5%)と高水準を維持したほか、日銀券発行残高が同 3.2%と、現金需要が急増した東日本大震災直後の2011年4月以来の高い伸びとなった(図表10,11)。

マネタリーベース残高(平残)131.9兆円は前月をわずかに下回ったが、季節調整済み残高では過去最高を更新している。

日銀の度重なる金融緩和(基金増額)によりマネタリーベースは増加を続けている。今後も予想できる期間内における緩和規模縮小は考えられず、マネタリーベースは前年比プラスでの推移が予想される。

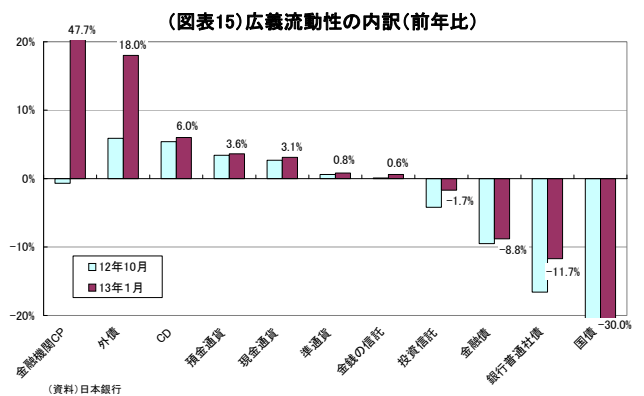
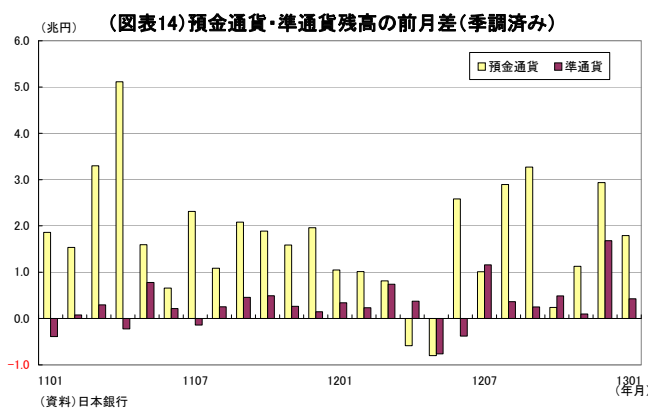
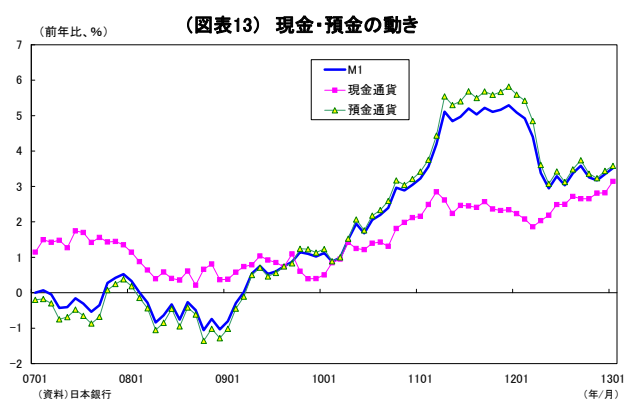
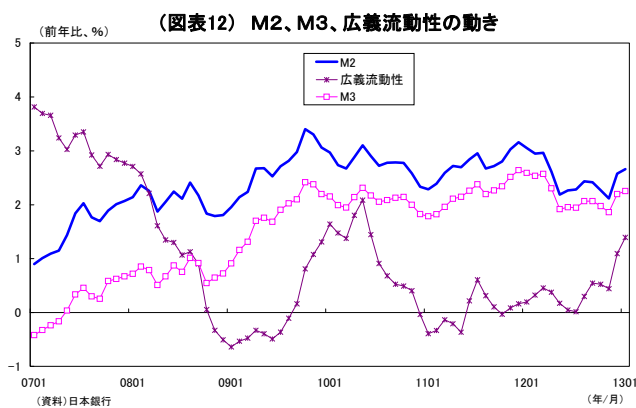


#### 4. マネーストック：リスク回避姿勢はやや後退

通貨供給量の代表的指標である1月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高の伸び率は前年比2.7%（前月は2.6%）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同2.3%（前月は2.2%）とともに前月から伸び率がやや拡大した。また、M3に投信や外債などを含めた広義流動性の伸び率は前年比1.4%（前月は1.1%）と前月に続いて拡大基調が鮮明に。広義流動性の伸び率は2010年6月以来の高水準となる（図表12,13）。

季節調整済み前月差をみると、預金通貨（普通預金など）ならびに準通貨（定期預金など）への資金流入は続いているが、集中度合いは緩和されてきている（図表14）。広義流動性の内訳を衆院解散表明前の昨年10月時点と比較してみると（図表15）、円安による円換算押し上げ効果が出ている外債を除いたとしても軒並み伸び率が改善しており、リスク性資産の色彩が強い投資信託（元本）もマイナス幅が縮小している。

まだ積極的にリスクを取る動きが本格化したわけではないが、円安・株高トレンドの継続という投資環境の改善を受けて、マネーのリスク回避姿勢がやや後退しているようだ。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。